

添削文が語る日本語のスタイル

－（１）完了表現と時制－

中川正弘

(広島大学留学生センター・助教授)

0. はじめに

先年、外国人の書いた日本語作文を日本人が添削した場合に現れる文体の違いについて考察した。その際、同じ作文を6人の日本人がそれぞれ書き直したものを文単位で比較し、その分析を行った。これは、そもそも外国人の日本語がどのようなものであるか、その誤りの分析、スタイルの分析をできるだけ正確に行おうとしてであった¹⁾。

外国人が書いた日本語の添削と言うと、わたしたちは正／誤という単純な図式で見てしまいがちだ。添削は誤りを正しく書き直してあるのであり、書き換えていないところは正しいのだろうと考える。しかし、実際に書き換え箇所も書き換え方も微妙に異なる幾つもの添削を見てみると、どこが正しくて、どこが誤りなのか、確信がもてなくなる場合が少なくない。そこで、添削のヴァリエーションを元の作文と等距離に置き、細かく検討してみたわけだが、そうすることで誤りがどのようなものか、それがどうして生じたのかが考えやすくなっただけでなく、日本人の日本語とはどのようなものか、その一端を見ることもできた。本稿ではこのようにスタイルの微妙に違う日本語を接近させた時、スパークするところから日本語を考えてみたい。

1. スタイル分析の場と条件

昨年から今年にかけて、外国人学生と日本人学生と一緒に受講する講義・演習を担当することになった。これは、日本人学生には外国人の使う日本語を鏡として自分たちの日本語を見直させ、また外国人学生には日本人の使う日本語を鏡として自分たちの日本語、さらには自分たちの思考や感性を見直させる場にできるので、外国人の作文に対して日本人が行った添削のヴァリエーション、日本語のスタイルの比較から日本人の思考や感性、またその背景となる文化や社会を考えさせることにした。

手順としては、まず留学生に好みのテーマで作文を書かせた。そして、日本語のスタイルサンプルとなる添削を収集させるために、だれか知り合いの日本人五・六人に読んでもらい、添削を頼むように指示した。こうして集めた日本語のサンプルの比較から出てくるスタイルの差異を、留学生と日本人学生の質問、意見を交えながら解説し、議論したのである。

サンプルが同じでも、一人で考察する場合には、文体異常に対する感覚の反応、その解

積、判断のどの過程においても死角が生じがちだ。しかし、今回のように元の素材になる作文を書いた学生、また頼まれて添削を行った学生も含め、留学生と日本人学生のいる場で分析や解釈を行えたので、事前の予備分析では思い至らなかった見解もいろいろ出てきた。

2. 添削のヴァリエーション

以前採り上げた作文例は、書き直し箇所が多いものだったが、今回採り上げる作文例は、日本語能力がかなり高い留学生のもので、書き直し箇所はそう多くない。

「阪神大震災から学んだこと」

平成7年1月17日に起きた阪神大震災は、多くの犠牲者を出し莫大な財産の被害を及ぼすことになった。

当時、神戸の関西学院大学に在学中だった私は、地震というものがあれほど恐ろしいであることを、最も身近なところで知るようになった。今まで生きてきたなかで一番怖い経験であったことは確かだ。しかし、わずか16秒間の揺れであれほどの大きな被害が出るとは信じられなかった。

神戸でもかなりの被害を受けた西宮市に所在している私の学校は、建物の破壊以外に17人もの学生が亡くなったことは誠に残念である。さらに、教職員やその家族を含めたら震災の犠牲者は60人にもなる。大学では、犠牲者のために追悼礼拝が行われたが、その悲しみはことばでは表現できないものだった。

しかし、多くの人々はただ悲しんでるだけではなかった。大学と西宮市の体育館に集まっていた被災民のために、市民、学生が一つになってボランティア活動が行われていた。西宮市だけではなく、日本全国から被災地神戸に食料支援や人的支援が活発に行われたことに大変感動した。

日本人は個人主義であるため人に迷惑をかけないようにしているが、特に人を助けようとしめないのではないかという私の考え方は、困っている人々を助け合う日本人の姿を見て、今までの日本人に対する見方が大きく変わった。

不幸にあった人々を、国や民族、宗教などを乗り越えて助け合うことが真の人類愛であることを阪神大震災を通じて学んだのである。

*下線部は移動、太文字は書き換え、字消しは抹消

(1)

O - 平成7年1月17日に起きた阪神大震災は、多くの犠牲者を出し莫大な財産の被害を及ぼすことになった。

A - 平成7年1月17日に**阪神淡路地区を襲った**阪神大震災は、多くの犠牲者と莫大な財産の被害を**もたらした**。

B - 平成7年1月17日に起きた阪神大震災は、多くの犠牲者を出し莫大な財産の被害を及ぼすことになった。

C - 平成7年1月17日に起きた阪神大震災は、多くの犠牲者を出し莫大な財産の被害を**及ぼした**。

D - 平成7年1月17日に起きた阪神大震災は、多くの犠牲者を出し、**経済面でも**莫大な財産の被害を及ぼすことになった。

E - 平成7年1月17日に起きた阪神大震災は、多くの犠牲者を出し莫大な財産の被害を及ぼすこととなった。

(2)

O - 当時、神戸の関西学院大学に在学中だった私は、地震というものがあれほど恐ろしいであることを、最も身近なところで知るようになった。

A - 当時、**私は**神戸の関西学院大学に在学中**であり**、地震というものがあれほど恐ろしい**もの**であることを、最も身近なところで知る**こと**となった。

B - 当時、神戸の関西学院大学に在学中だった私は、地震というものがあれほど恐ろしい**もの**であることを、最も身近なところで知る**こと**となった。

C - 当時、神戸の関西学院大学に在学中だった私は、地震というものがあれほど恐ろしい**もの**であることを、最も身近なところで知る**まう**になった。

- D - 当時、神戸の関西学院大学に在学中だった私は、地震というものがあれほど恐ろしい**もの**であることを、最も身近なところで知るようになった。
- E - 当時、神戸の関西学院大学に在学中だった私は、地震というものがあれほど恐ろしい**もの**であることを、最も身近なところで知るようになった。

(3)

- O - 今まで生きてきたなかで一番怖い経験であったことは確かだ。しかし、わずか 16 秒間の揺れであれほどの大きな被害が出るとは信じられなかった。
- A - 今まで生きてきたなかで一番怖い経験であったことは確かだ。**そして**、わずか 16 秒間の揺れであれほどの大きな被害が出るとは信じられなかった。
- B - 今まで生きてきたなかで一番怖い経験であったことは確かだ。しかし、わずか 16 秒間の揺れであれほどの大きな被害が出るとは信じられなかった。
- C - 今まで生きてきたなかで一番怖い経験であったことは確かだ。しかし、わずか 16 秒間の揺れであれほどの大きな被害が出るとは信じられなかった。
- D - 今まで生きてきたなかで一番怖い経験であったことは確かだ。しかし、わずか 16 秒間の揺れであれほどの大きな被害が出るとは信じられなかった。
- E - 今まで生きてきた**中**で一番怖い経験であったことは確かだ。しかし、わずか 16 秒間の揺れであれほどの大きな被害が出るとは信じられなかった。

(4)

- O - 神戸でもかなりの被害を受けた西宮市に所在している私の学校は、建物の破壊以外に 17 人もの学生が亡くなったことは誠に残念である。
- A - **私の大学は**、神戸でもかなりの被害を受けた西宮市に所在しており、私の学校は、建物の破壊以外に 17 人もの学生が亡くなったことは誠に残念である。
- B - 神戸でもかなりの被害を受けた西宮市に所在していた私の学校**では**、建物の破壊以外に 17 人もの学生が亡くなったことは誠に残念である。
- C - 神戸でもかなりの被害を受けた西宮市に**ある**私の学校**において**、建物の破壊以外に 17 人もの学生が亡くなったことは誠に残念である。
- D - 神戸でもかなりの被害を受けた西宮市に所在している私の学校は、建物の破壊以外に 17 人もの学生が亡くなったことは誠に残念である。
- E - **兵庫県**でもかなりの被害を受けた西宮市に所在している私の学校は、建物の**損壊**以外に 17 人もの学生が亡くなったことは誠に残念な**こと**である。

(5)

- O - さらに、教職員やその家族を含めたら震災の犠牲者は 60 人にもなる。大学では、犠牲者のために追悼礼拝が行われたが、その悲しみはことばでは表現できないものだった。
- A - さらに、教職員やその家族を含めると震災の犠牲者は 60 人にもなる。大学では、犠牲者のために追悼礼拝が行われたが、その悲しみはことばでは表現できないものだった。
- B - さらに、教職員やその家族を含めると震災の犠牲者は 60 人にもなる。大学では、犠牲者のための追悼礼拝が行われたが、その悲しみはことばでは表現できないものだった。
- C - さらに、教職員やその家族を含めると震災の犠牲者は 60 人にもなる。大学では、犠牲者のために追悼礼拝が行われたが、その悲しみはことばでは表現できないものだった。
- D - さらに、教職員やその家族を含めたら震災の犠牲者は 60 人にもなる。誠に残念である。大学では、犠牲者のために追悼礼拝が行われたが、その悲しみはことばでは表現できないものだった。
- E - さらに、教職員やその家族を含めると震災の犠牲者は 60 人にもなる。大学では、犠牲者のために追悼礼拝が行われたが、その悲しみは**言葉**では表現できないものだった。

(6)

O - しかし、多くの人々はただ悲しんでるではなかった。

A - しかし、多くの人々はただ悲しんでるではなかった。

B - しかし、多くの人々はただ悲しんでるではなかった。

C - しかし、多くの人々はただ悲しんでいるではなかった。

D - しかし、多くの人々はただ悲しんでるではなかった。

E - しかし、多くの人々はただ悲しんでいるではなかった。

(7)

O - 大学と西宮市の体育館に集まっていた被災民のために、市民、学生が一つになってボランティア活動が行われていた。

A - 大学と西宮市の体育館に避難していた被災者のために、市民、学生が一つになりボランティア活動が行われた。

B - 大学と西宮市の体育館に集まっていた被災民のために、市民、学生が一つになってボランティア活動が行われていた。

C - 大学と西宮市の体育館に集まっていた被災民のために、市民、学生が一つになってボランティア活動が行われていた。

D - 大学と西宮市の体育館に集まっていた被災民のために、市民、学生が一つになってボランティア活動が行われていた。

E - 大学と西宮市の体育館に集まっていた被災者達のために、市民、学生が一つになってボランティア活動が行われていた。

(8)

O - 西宮市だけではなく、日本全国から被災地神戸に食料支援や人的支援が活発に行われたことに大変感動した。

A - 西宮市だけではなく、日本全国から被災地神戸に食料支援や人的支援が活発に行われたことに大変感動した。

B - 西宮市だけではなく、日本全国から被災地神戸に食料支援や人的支援が活発に行われたことに**は**大変感動した。

C - 西宮市だけではなく、日本全国から被災地神戸に食料支援や人的支援が活発に行われたことに大変感動した。

D - 西宮市だけではなく、日本全国から被災地神戸に食料支援や人的支援が活発に行われたことに大変感動した。

E - 西宮市だけではなく、日本全国から被災地神戸に食料支援や人的支援が活発に行われたことに大変感動した。

(9)

O - 日本人は個人主義であるため人に迷惑をかけないようにしているが、

A - 日本人は個人主義であるため人に迷惑をかけないようにしている**のであり、**

B - 日本人は個人主義であるため人に迷惑をかけ**まい**として**いるが、**

C - 日本人は個人主義であるため人に迷惑をかけないように**にするが、**

D - 日本人は個人主義であるため人に迷惑をかけないようにしているが、

E - 日本人は個人主義であるため人に迷惑をかけないように**しているが、**

(10)

O - 特に人を助けようとし**ない**のではないかという私の考え方は、困っている人々を助け合う日本人の姿を見て、今までの日本人に対する見方が大きく変わった。

A - 特に人を助けようとし**ない**のではないかという私の考え方は、困っている人々を助け合う日本人の姿を見て、今までの日本人に対する見方が大きく変わった。

B - また人を助けようとし**ない**のではないかという私の考え方は、困っている人々を助け合う日本人の姿を見て、**今までの日本人に対する見方が**大きく変わった。

C - 特に人を助けようとし**ない**のではないかという私の考え方は、困っている人々と**助けている**日本人の姿を見て、今までの日本人に対する見方が大きく変わった。

- D - 特に人を助けようとしめないのではないかという私の考え方は、困っている人々を助け合う日本人の姿を見て、~~今までの日本人に対する見方が大きく変わった。~~
- E - 特に人を助けようとしめないのではないかという私の考え方は、困っている人々を助けようとする日本人の姿を見て、今までの日本人に対する見方が大きく変わった。

(11)

- O - 不幸にあった人々を、国や民族、宗教などを乗り越えて助け合うことが真の人類愛であることを阪神大震災を通じて学んだのである。
- A - 不幸にあった人々を、国や民族、宗教などを乗り越えて助け合うことが真の人類愛であることを阪神大震災を通じて学んだのである。
- B - 不幸にあった人々を、国や民族、宗教などを乗り越えて助け合うことが真の人類愛であることを阪神大震災を通じて学んだのである。
- C - 不幸にあった人々を、国や民族、宗教などを乗り越えて助け合うことが真の人類愛であることを阪神大震災を通じて学んだのである。
- D - 不幸にあった人々を、国や民族、宗教などを乗り越えて助け合うことが真の人類愛であることを阪神大震災を通じて学んだのである。
- E - 不幸にあった人々を、国や民族、宗教などを乗り越えて助けようとする~~ことが真の人類愛である~~ということが真の人類愛である~~ということ~~を阪神大震災を通じて学んだのである。

この五人の日本人の添削例に目を通し、何箇所かここをどうして直していないのだろうかとか、この直し方ではおかしいと感じる人がいるはずだ。この作文に自分では添削を行わなかった筆者の目にもおやと思える箇所がいくつかある。確かに間違っていたから書き直してあると明言できそうなところが多いが、間違いと思わなかったが書き直してあるところや、少し変だと思っても書き直さなかったところもあるようだ。

このようなことを感じ、さまざまな憶測を促すもの、それこそが個々の日本人が言葉（日本語）に対してとる姿勢や価値観、場合によって性格や思想にまで連なるスタイルの違いだろう。他方、おかしい言葉遣いまですべて含め、元の作文そのままを書いた者の「表現」としてこれを受け入れたいと思う人も少なくあるまい。

少なくとも書き換えられた箇所はたいてい何らかの考察に値し、実際、授業では一つずつ検討したのだが、ここでは、外国人学生と日本人学生が感想や意見を述べていくなかで、一見些細な書き換えでありながら文法に関して一般性の高い問題に議論が移っていった例を一つ採り上げる。

3. 日本語と時制

文法時制の体系、時制表現は言語によって様々だ。法(mode)を別にしても、英語なら現在／過去／未来／現在完了／過去完了／未来完了、フランス語なら現在／複合過去／単純過去／半過去／単純未来／大過去／前過去／前未来と、まず時制の項目数自体が違っている。また同じ現在時制だといっても、フランス語の現在時制は英語が現在進行形を用いる場合まで覆っている。そして、英語の現在完了(have + p.p.)とフランス語の複合過去

(avoir + p.p.) は、どちらも助動詞と過去分詞という同じ組み合わせで形成されてはいても、時制としての価値はかなり違っている。フランス語では単に現在／未来に対置される過去にすぎないが、英語では過去／現在の対立に絡む時制の位相となっている。さらに、フランス語においては、過去の出来事を語る時、語りの主軸となる時制が単純過去 (passé simple)、複合過去 (passé composé) と二種あり、この選択によって「語りの質」が表現される。例えば、同じ歴史的事実をどちらの時制で表しても、ただスタイルが違っているだけで、過去という時間的価値に差はない。つまり、文法によってというより文化コードによって、いわば**制度**として選択されるのだが、このように特殊な時制の選択は英語のほうにはない²⁾。

このように考えれば、ある言語の時制が他の言語に完全に翻訳されることはないと言わざるを得ないのだが、だからと言って、英語とフランス語の間で翻訳ができない、また、これらの言語と日本語との間で実用上問題がない程度に翻訳できない訳でもない。過去／現在／未来という普遍的な時間の分節によって位置づけられる時制なら、多少の誤差が生じるとしても翻訳は可能だ。

日本語教育において時制という概念が前面に出されることはない。日本語には、過去や未来を表す動詞形がなく、従って当然現在形もないからである。しかし、時制の概念は隠然と日本語文法の扱いを規定してくる³⁾。日本語を学ぶ外国人は母語の時制概念、あるいは多くの言語に共通の、過去／現在／未来という時間の分節を言語を理解するための足場とし、教える側もこれに依拠しているからである。時制は日本語の文法に向かうための重要な視点となっている。

日本語と英語で動詞の体系がどれほど違っているか、一例を見てみよう。英語の時制に合わせるように、簡便に現在形／過去形と扱うことが多い、日本語の**する／した**は実際には現在形／過去形ではなく、終止形／連用形+完了の助動詞であり、**する**は一語、**した**は**し+た**の二語と捉えられている。動詞の活用で**する／した**の二つが特に対置されるわけでもない。つまり、時制の選択的な対立を基にした西洋言語の範列の形式自体日本語にはないのである。

英語やフランス語の時制が日本語に翻訳される時、「した／していた／してきた／する／している／していく」などが使われるが、これらは時制の翻訳に使えるというだけで、別に時制体系と見なされるわけではない。ただし、これらの定型的な訳語は英語やフランス語の時制体系に合わせて配列されやすい。推量という本来の意味をずらせて「だろう」が未来時制の翻訳で機械的に使われがちなのもこのせいだ。日本人の外国語学習における直訳スタイル、外国人のための日本語教科書における文法の範列的扱い、このようなものが多用され、学習者の理解を助けることができるのは、母語と外国語の二つの言語の文法がパラダイム化する人間の言語能力の様態そのものをそれが反映しているからであろう。

二つの言語の文法がこのように絡み合うものなら、習得中の第二言語における誤用という現象は、一方で密やかに進む第一言語自体の文法の変化とどこかで響き合っているはずだ。

日本語の習得が進み、かなりの水準に達している留学生は言葉遣いの間違いも少なくなり、それだけ日本人の日本語に近づいていることになる。しかし、僅かになった間違いのその量が日本人の日本語との距離を正確に示すものでもない。目に見える明らかな間違いが理解の不足を示すのは当然だが、間違えているわけではない言葉の選択にまだ理解の不足や誤解が埋もれているからである。

4. かな一つの書き換え

先に紹介した添削例の(4)には、ひらがな一つ分ではあるが、そのような日本語と時制の問題に関わる書き換えが現れた。

O - 西宮市に所在している私の学校

A - 私の大学は、西宮市に所在しており、

B - 西宮市に所在していた私の学校

C - 西宮市にある私の学校

D - 西宮市に所在している私の学校

E - 西宮市に所在している私の学校。

書き換えられた **ABC** 三つのうち、**B** だけが**いた**と書き換え、時制で言えば過去か完了に変えたように見える。そこで、まず留学生たちにここに見られる**いる**／**いた**についてどう思うか聞いてみた。すると、ひとりの学生が、「この学校はなくなったわけではなく、今もあるのだから、**いた**を使うのは間違いでしょう」と言い、他の留学生たちもみなそうだそうだというように頷いた。地震があったとはいえ、今も存続しているこの「学校」という主語とこの動詞の組み合わせで考えれば、英語やフランス語に限らずどんな言語でも現在時制が正しい。相応しいのは完了、過去を表す**いた**ではなく、**いる**のほうだろうと考えるのである。

それでは、この **B** の添削を行った日本人は地震のせいでこの学校がなくなったと勘違いをしたのだろうか。そうとも思えない。それでは、よくある言い間違いのようなもので、何となく**いた**を選んでしまったのだろうか。しかし、この元の作文は **B** が書いたものではない。**B** は**いる**の**る**を抹消して、**た**に書き換えたのである。ということは、思わず間違えたというようなものではなく、何らかの確信を持って積極的にここで**いる**を使うことに意義を唱えたということではないのかとさらに聞くと、留学生たちは考え込んでしまった。論理的には当然正しいはずの**いる**が否定されるということはどう捉えればいいのか分からなくなったようだった。

そこで、今度は日本人学生の方に「一体どちらが間違いなのだろう」と聞いてみた。すると全員が「両方正しい」と答えた。そして、一人が、「**いる／いた**の両方正しいと言えるが、この作文の書き手がこの学校を卒業して、今広島へ来ているのだから、**いる**より**いた**を使う方がいい」と言った。そこで、「それでは、卒業したという過去の事実を受けて**所在している**という別の動詞の時制が完了、過去になるということだね」と言うと、「そうです」と答えた。これを聞くと、留学生たちはみな驚いたようだった。このような内容の文章で、**いる／いた**の両方とも正しいと思いながらも**いる**の方を選ぼうとする日本人も少なくないだろうが、それは英語などの時制の選択基準に引かれてと感じられなくもない。

これは、日本語の動詞の「時制選択」の問題を考えさせるための導入となった。先にも述べたように、**いる／いた**のような対立は日本語教育において英語などの時制にならって動詞の扱いを簡略化し、現在／過去（完了）と扱うことが多く、それはそれで学習者の理解を助けてくれる。その結果、初級日本語を終えた外国人学習者はまず例外なく、次のような文を綴るようになる⁴⁾。

・日本に**来た**前、わたしは日本語を勉強したことがなかった。

いる／いたが英語の時制と同じように扱われていれば、過去のことを語る時、時制の一致規則からこのように**来た**にしなければいけないと考えて当然だ。時間表現として使える組み合わせと使えない組み合わせをまとめておこう。

・来る前	来た前
・来る時	来た時
・来る後	来た後

前／時／後と動詞の連結のうち抹消した二つは誤りと言うしかないが、このような内容を同時に英語やフランス語でも考えていると、二つの排除される組み合わせはどうして誤りなのか、充分意味も通り潜在的には可能ではないかとも思えてくる。

また、外国人に奇異と感じられる日本語の動詞形の選択には次のようなものもある。こちらに向かってくる人や乗り物が遠くに見える時、日本語では「来る、来る」よりもどちらかと言うと「来た、来た」と完了形を選ぶ。そして、何か探し物をしていて、それをとうとう見つけたとき、こちらは「ある」ではなく絶対に「あった」を選ぶ。これらも完了の用法としては同質と言えるだろう。完了の意味要素が表面上接続する動詞とは別に、これと類義性によって、あるいは隣接性によってパラダイムを成す、そこに不在の動詞の完了を表すのである⁵⁾。「来た、来た」では「待つ」か「見える」の、「あった」では「探

す」あるいは「見つける」という行為の完了が表されていると言えないだろうか。

5. おわりに

添削を一例ずつ見ると、そこに行われた書き換えは、外国人の使ったどこかが違う日本語と日本人の日本語との一対一の対比のせいで、正／誤、良い／悪いのようにどうしても単純に感じやすい。しかし、添削を行っている時、元の文章の内容を理解するためにも、どこを書き換えるか判断するためにも、またどんな言葉に書き換えるか、言葉を選ぶためにも、さまざまなことを感じ、考えているものだ。そして、添削を終えた文章についても、書き換えを控えたことによる心残りを感じたり、書き換えすぎたのではないかと反省したりする。何通りもの書き換え方を見比べていると、朱書きによって定着しなかった感覚や思考、添削をしている最中の意識の活動を追体験しているように感じられる場合も少なくない。

言葉を巡る思考は対象となる言葉が長ければそれに比例して長くなるというものでもあるまい。ここで採り上げたのは、見ようによってはひらがな一つの問題だが、この書き換えに関して行った解釈や議論は、この書き換えを選んだ者だけではなく、もとのまま書き換えずに置いた者によっても経験されていないとは言えまい。つまり、それぞれの書き換えが一人一人のスタイルを示していると同時に、これらの書き換えすべてを包括する思考の幅、それこそ日本人の日本語のスタイルなのだろう。

注

1) 作文の添削と文体差、『広島大学留学生日本語教育』第7号、1996年

2) 小説における語りの制度性と動詞時制の問題については論じたことがあり（小説の制度とレトリック-ロブ＝グリエにおける語りと動詞時制の問題、『広島大学フランス文学研究』8号、1989年）、そこでも考察したことだが、それ自体純化した制度と言える言語は、一つの言語社会に生じ、歴史に添って変化する社会的、文化的な制度と密接に関わっている。

フランス語には「過去」という時間を表す形が「複合過去」、「単純過去」、「半過去」と三つある。アスペクトが異なり、他の二つのどちらかを語りの主軸として、それと組み合わせられて用いられる「半過去」を別にして、語りの主軸となる二つの過去形、「複合過去」、[単純過去]は微妙な意味の差異の説明が発生論的に行われもするが、このような意味の差異が現実の使い分けの指標となる訳ではない。二つは、文法という言語内規則に支配されるのではなく、フランスの言語文化に存在する相対立する二つの範疇の象徴として機能している。「単純過去」は文語のもの、つまり書く時に用いられるものであり、「複合過去」は口語、話す時に用いられるものだというのが伝統的な説明である。しかし、「複合過去」が話す時だけではなく書く時にも使われていることを考えるならこの説明は適切ではない。そこで、バンヴニストは通常の文法概念では説明しきれないフランス語の動詞体系のこの問題を、「発話者」と「対象内容」との関与性が異なる二つの言語空間の対立だと見なし、この二つの範疇を«histoire»/«discours»と識別した(BENVENISTE, Emile, «les relations de temps dans le verbe français», in *Problèmes de linguistique générale*, I, Coll.Tel, Gallimard, 1966)。バンヴニストは言説の人称性とも密接な関係があるこの二つの範疇それぞれの時制組織を「単純過去・半過去・大過去」と「現在・未来・複合過去」と説明しているが、これは小説作品の語りの時制編成で言えば、語りの地の部分と登場人物の会話部分における時制の使い分けに端的に現れるものである。

また、このバンヴニストの見方を押し進め、特に文学作品における動詞時制の選択的使用を、テキスト構造の視

点から分析するハラルト・ヴァインリッヒ (WEINRICH, Harald, *Le temps*, Coll. Poétique, Seuil, 1973) は、「discours」以外にも出現する、つまり物語の領域にも一部使用される「複合過去」の用例 (物語の「額縁」のように導入部と終焉部に用いられる) も覆える概念として、「récit」/「commentaire」を当てている。物語部で用いられる「複合過去」が「commentaire」の時制だと言うのは、助動詞に現在時制を用いることで「語り手」の過去の「出来事」に対する関与性が高まるからであろう。これらの対になった概念は意味領域をかなり共有しながらも、重要な差異をそれらのずれの中に入れておいたのだが、どの定義も、フランスの言語文化におけるこの制度の安定性を示しており、日常言語では用いられることのない「単純過去」はこうした制度の象徴となりえている。

伝統的説明	Passé simple langue écrite	Passé composé langue parlé
Benveniste	histoire	discours
Weinrich	récit	commentaire

- 3) 例えば、日本語の初級文法において、品詞の違い、組み合わせられる助詞の違いを越えて、「～がしたい／～をしたがる」を英語やフランス語の人称変化にならば、範疇的に扱うことも多い。
- 4) この動詞接続を勉強してしばらくは教科書の文例をそのまま覚えているため、正しく接続できる (実際には選択⇒接続ではなく、その組み合わせを一つの纏まりとして覚えているだけであろう)。本当の意味で選択が行える段階になると、半ば普遍的な時制の選択にならば、過去について語る時には「日本に来た前」のように時制を一致させようとするのが普通だろう。これは長友和彦 (誤用分析研究の現状と課題、広島大学留学生センター紀要、第1号、1991年) によって論じられた「楽しかったです⇒楽しいでした⇒楽しかったです」の習得段階に重なる。
- 5) パラダイムは類似性によってのみ組まれる系であり、隣接性によって組まれるのは統辞系であるとされることがある (Jacobson, Roman, *Essais de linguistique générale*, traduit par N. Ruwet, Ed. de Minuit, 1963) が、類似性による比喩である隠喩と隣接性による比喩である換喩 (部分と全体の関係に基づく提喩を含む) のどちらも、比喩として、ある語の代理表現の選択肢に並ぶものなら、やはりその語とパラダイムをなしていると言うべきだろう。ここで採り上げた「ある」は「見つける」と明らかに隣接しており、完了の「た」は「見つけた」に対して部分で全体を表している提喩と見なすことができる。また、「来る」のほうも「待つ」か「見える」と隣接し、「た」が同様に「待った」を提喩として表すと見なせる。
- 意味の異なる語の間に等価性が成立し、表現の代理が行われる、これが隠喩、換喩、提喩などのレトリックの基本的な意味作用だが、文法の考察にこのような視点を採り、文字どおりではない意味作用の次元を交差させることも必要ではないだろうか。

Le Groupe μ , *Rhétorique générale*, Larousse, 1970 は、単なる分類と命名の学にすぎなくなっていた修辞学を、言葉の文字どおりではない意味現象の学として構築し直している。そこで提出された視点は文字どおりではない文法を考えようとする場合にも有用と思える。